
世界の屋根を撃つ雨のリズム

ビッキー・ホリディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の屋根を撃つ雨のリズム

【Nコード】

N5604V

【作者名】

ビッキー・ホリデイ

【あらすじ】

お互い一緒にいることがあたりまえになり、微妙な雰囲気になってしまっている若いカップル。ただ流れるがまま生活する彼らの様子を描いた作品。この小説はブックログにも投稿しています。

リリが裸のままタオルケットにくるまって寝ようと、ベッドを軋ませる音を背中であらきながら、俺はベッドの隅でティッシュを手にも、まだ固い自分のペニスについている体液を拭き取っていた。この部屋の外では梅雨入りとほぼ同時の二日前から大雨が降っていて、それによる湿気のせいかどうかはわからないが、ティッシュがペニスにこびりついてしまいうまく拭き取れない。俺は早々に諦めてボクサーパンツを穿き、ベッドから立ち上がった。フローリングは湿気と汚れでベタついていた。

ひとり暮らし向けの小さな冷蔵庫を開けると、ムツと鼻を突く不快な臭いがした。無造作に置かれている腐った牛乳や野菜などを横にどけて、トマトジュースの奥から缶ビールを一本取り出した。プルタブを開けて一気に半分ほど飲むと、喉が潤い、ようやく正気になれた気がした。冷蔵庫のすぐ横のキッチンからはすえた臭いがしてくる。使ったままの食器が山のように流しにぶちこんであるせいだ。食器を洗うためのスポンジはボロボロで、カビまで生えている始末だった。

ベッドからはリリの寝息が聞こえてくる。俺は流しに寄りかかって、寝ているリリの細い背中を見ながらビールを飲んでた。傷みきったパサパサの金髪が、汗で背中にくっついていて、煙草を取りにテールまで行き、そのそばのベッドを見下ろした。リリの顔はぼさぼさの髪に隠れて見えなかった。視線をずらすと小さく膨らんだ乳房が腕の影から見えた。

俺の煙草は切れていた。買いに行こうにもこの大雨ではとても外に出る気にはなれない。三ブロックほど歩けばコンビニがあるが、風も強いので億劫だった。仕方なくリリのピアニッシモを一本、拝借した。当然ながら、普段もつと重い煙草を吸っている俺としては、まるで吸ってる気にはなれなかった。深呼吸をしているだけのよう

な気分だった。

ビールの最後の一口を飲み干して、缶を流しへ放り投げた。それから吸い殻で溢れかえった灰皿に無理やり吸っていた煙草をねじ込むと、俺もリリの横で眠ることにした。冷房を点けようと思ったが、すぐにエアコンが壊れていることを思い出し、諦めて横になった。ベッドのシーツは俺とリリの汗で湿っていた。

ドスの利いた怒号のような声で俺は目を覚ました。横になったまま目を開けると、リリはベッドからいなくなっていた。目の前の窓は雨に打たれ、外の様子はまるでわからなかった。けたたましい爆音を辛抱強く聞いていると、やっとその正体がわかった。

「……ホルモンか」

俺は音のする方へ身体を向けて言った。マキシマムザホルモン。

曲は「絶望ベリー」。

「あ、シュウ。起きてたんだ」リリはピンクのキャミソールにデニムのホットパンツという格好をしていた。そして、鉄仮面のような無表情でそう言った。

「起きてた、んじゃない。これで起きたんだよ」

リリはなにも言わなかった。黙ってグラスになみなみと注がれた赤い液体を啜っていた。

「ブラッディ・メアリーか」

「飲む？」

俺は黙って頷いた。リリはグラスをテーブルに置くと流しへ行き、汚れた食器の山からグラスを取り、軽く水ですすいだから俺のブラッディ・メアリーを作り始めた。

「タバスコは？」

「多めに入れてくれ」

できあがるとリリは黙って俺にそれを差し出してきた。俺も黙ったまま受け取り、一口啜った。

「ちよっとそれ、消してくれないか」

さつきから聞こえてくる爆音に、俺は頭がいかれそうになっていた。リリはなにも応えずに自分の傷んだ髪の毛の先を眺めていた。俺は立ち上がり、デッキのそばまで行くと「消すぞ」と言って停止ボタンを押した。

「なにすんのよ」

「いまはそういう気分じゃないんだよ」

リリは舌打ちをして、自分のブラッディ・メアリーを一気に飲み干すと、そのグラスを流しに投げた。ガラスが碎ける軽い音が部屋に響いた。それから外の風がベッドのそばの窓を揺らした。

俺はベッドに腰かけてテレビを点けた。昔のドラマの再放送がやっていった。もうそんな時間なのか、とテレビの横にある時計を見ると、やはり午後三時半過ぎだった。ザッピングしようとしてリモコンを手にとると、「ちよつと待って」とリリが言った。

「ケイ君、やっぱカッコいいな……」

リリはそれだけ言うと自分の煙草に手を伸ばし、口に咥えると火を点けた。俺はそれを見るとザッピングをした。しかしどの番組も興味をそそられることはなかった。

「ケイ君ねえ」

俺はひとり言のように呟いた。別に返事を求めているわけではなかったが、リリに聞こえていたようだった。

「なんでよ、カッコいいじゃん」

ケイ君とはリリの好きな俳優で、リリに限らず若い女を中心に人気がある。確かにリリの言うようにルックスは申し分ないが、どこか自分のルックスに「甘えて」「生きているような感じがして、俺は好きになれなかった。

「まあ、確かにカッコいいとは思っけど」

「けど？」

「いや、いい。なんでもない」

俺はそう言ってテレビを消した。リリは「なによそれ」と言うと灰皿に吸い殻を突っ込み、ベッドのそばまで来た。俺はブラッディ・

メアリーを飲み干してリリの手首を掴み、俺の横に座らせた。細く骨張った肩を抱き寄せる。リリはなににも言わない。俺が顔を近づけると、リリは軽く俺を押しやった。

「いまはそういう気分じゃないの」

俺は立ち上がって落ちていた自分のシャツとチノパンを身につけて、玄関でサンダルを突っかけた。

「どこに行くつもり？」リリは別段興味がないような声で訊ねた。

「煙草買ってくる」

俺はそう言うのと傘立てからビニール傘を手にとって外へ出た。外は荒れに荒れていた。それでいて蒸し暑く、世界が淀んでいるようだった。いままでいたアパートの敷地から出るときに、ビニール傘は骨が折れて傘布のビニールはどこかへ飛んでいつてしまった。舌打ちをして傘の残骸をその辺に捨てると、そのままコンビニへ向かった。生ぬるい雨が容赦なく俺に降り注いだ。

コンビニに着くころには、俺に濡れてない部分などなかった。コンビニの店員は俺の親と同年くらいの女で、俺を見ると「こんな天気の日になにしてるんだか」といったような、憐れみに近い表情をしたように見えた。俺はそれが気に食わなかった。

「こんな雨、昔じゃ考えられないわよね。やっぱり温暖化で日本が熱帯になって」

「セブンスター」

ババアは減らず口ばかり叩きやがる。店員は俺が話を遮ったのを気にする様子もなく、「ボックスでいいの？」と訊いてきた。「ソフト」と俺は言った。煙草を受け取るとすぐに外へは出ず、ついになにか食べる物でも買っついでと店内を物色した。

特に腹が減ってるわけでもなければ、これが食べたいというものもなかった。俺は適当にメロンパンとカレーパン、シーチキンと昆布のおにぎり、あとは紙パックのコーヒー牛乳を二つ、カゴに放り込んで会計をした。今度は黙ってレジを打っていた。

外の様子は相変わらずだった。俺はビニール袋の口を握り、全身

に吹きすさぶ風や降り注ぐ雨を受けながらアパートに向かって歩き出した。シャツが身体に張り付き、チノパンは水を吸って今にもずり落ちそうになっていた。周りには誰もいない。コンビニが営業していたことが奇跡だと思えるほど人気はなく、車も通っていないかった。ただただ風が通りすぎる音と、雨が屋根や道路を叩く音が聞こえるばかりだった。

アパートに戻ると、俺は玄関で全裸になり服はその辺に脱ぎ捨てた。リリは椅子に腰かけて携帯電話をいじっていた。俺が帰ってきたことに気づいたかどうかも怪しいものだった。部屋ではマキシマムザホルモンの爪爪爪が鳴り響いていた。俺は構わずにテーブルに買ってきた物を置くとバスルームへ行き、熱いシャワーを浴びた。

バスルームから出て、新しいシャツとパンツに着替えた。リリの隣の椅子に座り煙草に火を点けると、さっき買ってきたカレーパンを袋から出し、食べた。リリはシーチキンのおにぎりを食べていた。カレーパンは多少辛いだけでなにも味がしなかった。俺は半分食べるとテーブルに置き、コーヒー牛乳を飲んだ。

突然、リリが小さく笑い出した。見ると携帯をいじっていた。きつと、メールでもしているのだろう。俺は吸いかけの煙草を啜えた。その瞬間、インターフォンが鳴った。リリはなんの反応も示さなかった。五回やり過ごしたが、六回目か鳴ったときに俺は諦めて玄関まで行った。無言でドアを開けると、隣の部屋に住んでいる男が立っていた。その男はいつかに、歳は俺やリリより三つ四つ上だと大い家から聞いたが、見た目はとくに三十歳を超えているように見えた。

「なんすか」

男が黙ったままだったので、俺から切り出した。

「いや、あの、ここの音楽がウチにまで聞こえてくるんで、ポリュームを下げてもらえませんかね」

男は俺の顔を見ず、その奥の部屋を見ていた。ホームレスを横目でチラリと見て通り過ぎていくときのような表情だった。

「ああ、はい、わかりました」

俺がそう言つと、男はよろしくお願いしますと言つて自分の部屋へ戻つていった。俺が戻つてきてもリリはなにも言わないどころか、携帯から目を離すことがなかった。俺が黙つてデッキの電源を切ると、ようやく口を開いた。

「聴いてたんだけど」

「隣から苦情が来た。うるせえつてさ」

「隣つてどつちよ」

リリは携帯から目を離し、気のない目で俺を見た。

「山崎さんと」

俺がそう言つとリリは立ち上がつて玄関まで行つた。

「なにする気だよ」

「あの素人童貞に、二度と生意気な口を利けないようにしてやるのよ」

リリは冗談で言っている風ではなかった。俺はリリのそばまで行き「やめてくれ。俺の家だぞ」

と言つた。リリはあからさまに大きなため息をつくと、なにも言わずに椅子まで戻つた。それから煙草に火を点けてまた携帯をいじりはじめた。俺は玄関からベッドのそばの窓を見た。まだ雨は降っているようだが、だいぶ弱くなっていた。立つたまま窓を見ていると、リリが携帯を閉じて窓に目をやるのが見えた。それからおもむるに立ち上がつて、床に落ちていた自分の服を拾い、着替えた。

リリがこちらを向いたときに目があった。

「そろそろ帰るわ」

玄関まで来ると、俺の横を通つてミニールを履き始めた。

「送つていこうか」

リリは小さくうん、と言つた。俺はすぐに着替えて、煙草と財布をズボンのポケットに突っ込み、キーケースを手を持って二人で外へ出た。雨は弱くなつたとはいえ、敷地を出てすぐのところにある駐車場まで傘をささずに歩いたら、だいぶ濡れてしまった。そのま

ま車に乗り、すぐに発進させた。

車内でも無言だった。エンジンの音と共にカーステレオから 9 m Parabellum Bullet の曲が流れている。道路は水はけがよかったので、スリップの心配はなかった。しかし、風はまだ強く、ハンドルを取られないようにするのに気を遣った。リリは黙って窓の外を見ている。

「ねえ、ドライブがしたい」

唐突にリリが言った。俺はああ、と曖昧に返事をした。リリの家を通り過ぎ、大通りへ出る交差点で信号待ちをした。右から左へ、左から右へ、車やバイク、歩行者が俺たちの目の前を通り過ぎていく。通り過ぎる車の中にはライトを点けているものがあった。上から押しつぶそうとしているかのような雨の日の夕方だ。確かに薄暗かった。俺がライトを点けたのとほぼ同時に、信号が青になった。右にウインカーを出してから、右折した。

道が空いていたので、制限速度を三十キロほどオーバーして車を走らせていた。車内に流れている曲とシンクロしていくような感覚だった。しかしそれはすぐに破られた。リリが少しだけだが窓を開けたからだ。横からライターを擦る音が聞こえる。するとすぐにピアニッシモの匂いが鼻を通った。曲は風の音が邪魔でろくに聞こえなかった。

お互いに黙々と食べている。俺はハンバーグセット、リリはラザニアを注文した。待っている間も会話はなく、灰皿に吸い殻が溜まっていくばかりだった。

しばらく車を走らせて都内へ入ると、コインパーキングに駐車してどこにでもあるファミレスまで歩いた。周りの人たちはみんな傘をさしているなか、俺たちは濡れながら歩いていた。

ハンバーグセットは、ハンバーグとエビフライに付け合わせが鉄板に乗っていて、それに加えてライスとスープが付いたものだったが、どれもこれもうまくもなければまずくもなかった。リリもそれ

は同様らしく、ルーティンワークをこなしていくかのように手と口を動かしていた。

食後にコーヒーを頼んだ。二人で煙草を吸いながら飲んでいると、俺の携帯に着信が来た。出るとざわざわとした耳障りな音に紛れるように、ロコの、男の割りに甲高い声が聞こえてきた。

「シユウ？ いまなにやってんだ？」

「リリとファミレスでメシ食ってたところだよ」

俺がそう言うと、リリはチラと視線を俺によこした。

「なんだ、デートか」

「そういつわけじゃないんだ」

ロコが鼻で笑うのが聞こえた。

「まあ、いいや。これるようだったら、七時にジェイに来てくれな
いか？ リリちゃんも一緒に」

俺は耳から携帯を離して時間を確認した。六時半になったところ
だった。

「それは構わないけど、車でここまで来ちゃったんだよ」

「車なら隣の空き地に駐めちまえればいいよ」

「そうじゃなくて、俺だけシラフってのは嫌だよ」

「ああ、なるほどな。それなら終わったら俺の家で寝ていけばいい
よ」

「わかった、ありがとう」

「じゃあ、またあとでな」

俺は電話を切って、リリにジェイへ行くことになったと告げた。

リリはコーヒーを一口飲んで、煙草を消し、すぐに新しい煙草に火
を点けると言った。

「ロコが回すの？」

「いや、その辺は聞いてない。ただ、回すなら真っ先に言ってくる
だろ、あいつは」

「確かにね。ここから近いの？」

「車で十五分くらいかな」

俺はそう言うのと立ち上がり、リリに行こう、と言った。リリもすぐに席を立ち、会計を済ませると車へ戻った。やっと髪や服が乾いてきたところで、また濡れるハメになった。

ジエイには七時五分前に着いた。入り口でチケットを買い、中へ入るとすぐにロコを見つけた。

「こんな天気の日でもお構いなしか」

「いやあ、ずっと家にいたから暇でしようがなかったんだよ」

フロアへ入ると、すでにステージではDJがターンテーブルを回していて、その近くで何人かがグラスを片手に踊っていたりリズムを取っていたりしていた。ざっと見回すと、今日はそんなに客はいないようだった。

「ロコも回すの？」

俺がそう訊くと、ロコはショットグラスを三つ持ってきて、俺とリリに一つずつ渡した。

「いや、今日はふらつと来ただけなんだ」

「家の近くにクラブがあるなんて羨ましいな」

ロコはショットグラスを頭の上に掲げた。俺とリリもそれに倣い、ロコの音頭と共にグラスを空けた。リリはむせていた。

ジエイに来てから一時間が経つころには、俺もロコもずいぶんと酔っていた。客もそれなりに入ってきていて、全体的にもそこそこ盛り上がっているようだった。ただ、出てくるDJは揃いも揃ってクソだった。

フロアの奥にあるバーのカウンターに寄りかかって、俺とロコはまるでセンスの感じられない選曲やつなぎに関して、周りが騒がしいのをいいことに大声で毒づいていた。

「あれ、そう言えばリリちゃんは？」

ロコがそう言うまで、俺はすっかり頭からリリのことか抜けていた。さっきまで俺の横でブラッディ・メアリーを飲んでいたと思っていたが、それがいつのことなのか、俺にはわからなかった。

便所にも行ってるのか、と俺はロコに言った。ロコは俺の肩を叩き、便所の方を指さした。見ると背が高く線の細い男と、背は小さいが体つきのしっかりした男がリリとなにやら話している様子だった。男たちはかなり盛り上がっているようだった。リリの表情はここからでは見えなかった。

「ちよつとアレなんじゃないか？」

ロコは不安げな目で俺を見た。

「行ってきたほうがよさそうじゃねえか？」

ロコは俺から視線を外さない。

「ちよつと、俺、行ってくるわ」

ロコは一人でリリのところへ歩いていった。俺もテーブルに飲んでたウォッカトニクを置いて、そのあとを追った。来てみると男たちは白人だった。周りが騒がしくてよく聞こえないが、男たちはリリを口説いているようだった。白人二人に挟まれていたが、リリは臆する様子もなく、黙ってステージを見ながらブラッディ・メアリーを飲んでた。

背の高い方が、痺れを切らしたのか舌打ちをすると「アーユーメアリー？（『お前は生理か？』の意）」とリリに言った。リリは鼻で笑った。俺とロコは、白人二人がリリに一步詰め寄ろうとしたところで間に入った。

「あなたたちがオーガナイザーですか」

背の低い方が流暢な日本語でそう訊ねてきた。俺とロコは首を横に振った。

「こいつは俺の彼女なんだ」

俺がそう言うと、白人たちはそれは失礼しましたと陽気に言っただけで、とロコが呟いた。

「あいつらラリってたわよ」

閉店まではまだあったが、俺たちは白人たちと三杯、テキーラを飲むと店を出た。外は涼しく、雨に濡れていると寒いくらいだった。

リリはフロアから出るなり不機嫌な様子で白人たちを口汚く罵っていた。

「クスリに頼らなきゃナンパもできないヘタレなんて興味ないわよ」俺たちはロコの家には行かず、ジェイの近くにあるカラオケボックスに入った。ロコが「あんなクソDJなんかよりもハーコーなラップを聴かせてやるよ」と言っていたからだ。

朝の五時にカラオケボックスが閉まり、店を出るとロコとはそこで別れた。雨は上がっていて、久しぶりに青空を見た。俺とリリは車に乗り込み、エンジンをかけてからシートを倒して、しばらくぼうつとしていた。城を建てるようなギターリフが車内に響き渡る。

一曲聴き終わると、俺はシートを起こして車を発進させた。リリは黙って煙草を吸っていた。

「腹減ってる？」

俺がそう訊ねると、リリは減ってないと答えた。

「リリの家に向かえばいいんだよな？」

リリはうんと言った。

リリの家まで一時間かかったが、その間会話らしい会話はなかった。家に着くとリリは「じゃあね」と言って背を向けて家の中へ入っていった。俺は車のドアが閉まるのと同時に、発進させた。

台風一過のような天気だ。カーステレオをラジオに切り替えると天気予報がやっていた。今日と明日は晴れるらしい。その後は雨が続く見通しだとキャスターが言っていた。

俺の借りているアパートが見えてきた。隣の部屋の山崎さんが布団を干していた。駐車場に車を駐めて、エンジンを切る。外へ出ると、テンポよく布団を叩く音が聞こえた。無意識のうちに、BPMはどれくらいだろう、と呟いていた。俺はそれに気づくとふっと笑い、それから自分の部屋へと向かって歩き出した。

(後書き)

この小説のタイトルは、サザンオールスターズの曲名をつけました。
小説の内容と曲の歌詞の内容はまったく関係がありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5604v/>

世界の屋根を撃つ雨のリズム

2011年8月7日03時25分発行